彙　報

◇展示

○平成二八年五月一六日～六月一〇日
　春季展示「琉球貿易図屏風と琉球使節の「江戸上り」」

○平成二八年一〇月一一日～一一月一一日
　企画展「東日本大震災5年　近江商人とみちのく」
　企画展関連講演会（平成二八年一〇月二二日）
　・「中井家文書にみる江戸時代仙台の災害」
　　東北大学災害科学国際研究所准教授　佐藤大介氏
　・展示解説　　青柳周一

◇開催の記録

　史料館では、琉球貿易図屏風を二年に一回、春季展示において公開しており、本年度はその年にあたっていた。そこで今回の春季展示では、琉球貿易図屏風には琉球から中国へ派遣された「進貢船」と、琉球を支配していた薩摩藩の船が共に描かれている点に注目して、近世の琉・日・中関係をテーマとする企画を立案した。これは、現在の日本と沖縄、また日本と中国との間にさまざまな問題が生起していることも踏まえつつ、互いの関係を歴史的に振り返り、現状を捉え直す視座を観覧者へ提供したいという意図にも基づくものであった。
　琉・日関係史については、琉球が日本へ派遣していた「琉球使節」を大きく取り上げることにした。これは、史料館の収蔵史料中に、琉球使節が近江国内の中山道を通過した際の記録が数多く含まれているからこそ可能な企画である（個々の史料の内容は、本号掲載の青柳研究ノート参照）。展示の構成にあたっては、琉球使節関連史料と琉球貿易図屏風を通じて、近江という地域には琉球から訪れた人びとと直に接触・交流した歴史的経験があり、また琉球を窓口の一つとして近江を含む日本全体が中国と結び付いていたということを、観覧者に認識してもらいたいと考えた。
　そこで展示は、「江戸へ向かう琉球使節、近江国を通る」、「琉球貿易図屏風と北京への進貢使」、「柏原宿「万留帳」の中での琉球使節」という三つのコーナーで構成することにした。各コーナーでは近世の琉球使節を描いた刷り物や、琉球使節がたどった経路を示した地図、中国での進貢使の経路や福州に設置された「琉球館」を描いた絵図などもパネル化して掲示し、観覧者が展示内容を理解する一助とした。
　今回の観覧者数は五六〇人（学外一六三人、学内三九七人）であり、前年より一八六人減少した。これは、昨年度より会期が一週間短かったことと、高校の大学見学などによる団体での見学がなかったことによる。大学入門セミナーでの見学クラス数は昨年同様であった。
　今回から観覧者サービスの充実のために、ギャラリートークを実施した。これは「かんさい・大学ミュージアムネットワーク」によるネットワーク事業での企画への参加・協力の一環でもある。開催回数は計七回で、参加者は平均九人であった。昨年度より観覧者数が減少している通り、ギャラリートークが集客増に結びついている訳ではないが、参加者からは概ね好評であったので、今後も継続したい。
　またギャラリートークの拡大版を、経済学部ワークショップRed〔Rethinking excessively for Documentation〕の企画によるフォーラ

ム「沖縄サクセション」（六月九日）に組み込んで開催した。フォーラム当日の模様は、経済学部経済経営研究所のHPを参照されたい。（http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/eml/kouenkai2016/FM20160609.htm）。

秋季企画展は、本年度が平成二三年の東日本大震災から五年目であることから、被災地の歴史を史料館収蔵史料によって振り返るというコンセプトに基づいて立案した。これは、ＮＰＯ法人宮城歴史資料保全ネットワークによる「被災地の歴史再生叙述事業」など、被災地現地で取り組まれている「心の復興」を目指す諸事業に触発されたものである（史料館「ＳＡＭにゅうす」四五号参照）。

そこで注目したのが、近世の近江商人は北関東や東北地方で盛んに活動したため、かつての商家に伝わる史料群中に、被災地となった地域の歴史が記録された史料が数多く含まれていることである。今回は谷口兵左衛門家文書と中井源左衛門家文書から、仙台（宮城県仙台市）と石巻（同県石巻市）、中村（福島県相馬市中村）という三つの地域に関わる史料を選んで展示を構成した。選定にあたっては、各地での近江商人の活動実態と合わせて、飢饉や水害・地震などの記録といった、今後の被災地現地での歴史復元のために役立つであろう情報が含まれるものをなるべく多く取り上げた。

実際の展示は、「みちのくで商う―①仙台」、「みちのくで商う―②石巻・中村」、「みちのくの名所をたずねる」、「みちのくの歴史を記録する」の四コーナーで構成した。このうち二番目のコーナーでは、石巻市と相馬市より、震災前とその直後の旧北上川河口及び松川浦の状況を撮影した写真を提供いただき、パネル化して掲示できた。

観覧者数は四三〇人（学外三四八人・学内八二人）であり、前年より一七一人減少した。こちらも会期が一週間短かったことに加えて、滋賀県ほか関西圏での東日本大震災や被災地に対する関心の低さも浮き彫りになったと言い得るかもしれない。史料館自身としても、観覧者を惹きつけるような広報の手段を考える必要がある。

また今回の企画展が、滋賀と東北をつなぐ新たな地域連携の出発点となるよう、東北へ向けてより一層の史料情報を発信する方法を検討しなければならない。今後の課題である。

ギャラリートークは計七回開催した。関連講演会への出席者は三六人であった。

（青柳）

◇「菅浦文書」の再調査

今年度より、史料館では科学研究費助成事業（基盤研究（Ａ））「「菅浦文書」の総合調査及び村落の持続と変容の通時代的研究」（研究代表者・青柳周一、五年間）が採択された。これをうけて、研究分担者（滋賀大学・滋賀県立大学・琵琶湖博物館の教員・学芸員）および研究協力者（福井県教育委員会職員、京都大学院生およびＯＢ・滋賀県立大学の大学院ＯＢ）、リサーチ・アシスタント、研究補助者と共に、重要文化財「菅浦文書」の再調査を行った。具体的には、「菅浦文書」中の史料一点ごとに、研究史上でどのように解読・解釈されているかを点検してデータ化し、そのデータを踏まえて刊本『菅浦文書』の翻刻文を原本と照合してチェックする作業を実施した（原本保護の観点から、実際の照合作業には主にデジタル画像を使用）。『菅浦文書』での人物・年代比定や史料名なども再検討した。この作業は、昨年度

で終了した科学研究費助成事業（基盤研究B）「中・近世「菅浦文書」の総合的調査・公開と共同研究―中・近世村落像の再検討」の成果を踏まえ、さらに発展させるためのものである。

作業は研究会形式で六回行った。また、長浜市西浅井町菅浦で現地史料の調査と撮影を二回行った。（青柳）

◇博物館実習

九月一～九日の、土日を除く七日間の日程で、筑波大学四年生一人を受け入れ、博物館実習を行った。（青柳）

◇史料整理

「たねや近江文庫文書」一六一点、「平林村文書」二八九点、「南部辰右衛門家文書」一一九点、「山根甚左衛門家文書」二五点、「谷村英雄家文書」六五点、「谷村英雄氏文書」二〇点、「西川瀬右衛門家文書」二九点、「福性寺文書」三〇点、「中多良村田中家文書」四五点、「岩佐九兵衛家文書」四一八七点

◇発行

「SAMにゅうす」四四号、四五号

『東日本大震災五年 近江商人とみちのく』（平成二八年度企画展図録）

◇学内雑誌掲載日本史論文

『彦根論叢』第四〇八号「〈研究ノート〉『文芸民族』という場所（1）一九四〇年に香川で創刊された同人誌を知る」阿部安成

同「〈リレー・エッセイ「私の教育実践」〉プロジェクト科目「地域における歴史資料の保存と公開と活用の実践論」

・「受講学生とともに学ぶ：プロジェクト科目「地域における歴史資料の保存と公開と活用の実践論」をとおして」坂野鉄也

・「歴史資料をめぐる実践教育―現場へ出向き、現場で学ぶ」青柳周一

・「史資料の保存・公開と法」須永知彦

・「GMT（ぢもと）」阿部安成

『彦根論叢』第四〇九号「官立高等商業学校教育における人格養成 彦根高等商業学校本科の「哲学概論」と「文化史」をめぐって」今井綾乃

同「〈リレー・エッセイ「私の教育実践」〉経営史を学び教えること」井澤龍

『彦根論叢』第四一〇号「遊覧鉄道発起の虚構性 八幡電気軌道の観光社会学的考察」小川功

同「〈資料紹介〉シリーズ『青松』を読む⑩ 手づくりの記録 国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて」阿部安成

『滋賀大学経済学部研究年報』第二三巻「〈研究ノート〉高等商業学校「商業道徳」科の素描―「商業家」のための倫理とは―」坂野鉄也

同「〈研究動向〉「を生きた」「に生きる」を問う―『星ふるさとの乾坤』と『理性主義と排除の倫理』を読む―」阿部安成・石居人也

同「〈資料紹介〉シリーズ『青松』を読む⑦ 手づくると，戦（たたか）ひと，挙島へ―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.244「シリーズ『青松』を読む② 手づくりで詠む―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.245「楓の手づくり―国立療養所邑久光明園にお

ける第二次世界大戦後初期の総合誌―」阿部安成

Working Paper No.246「楓の印刷―国立療養所邑久光明園における第二次世界大戦後初期の文芸誌―」阿部安成

Working Paper No.249「なぞる/たどる―国立療養所菊池恵楓園社会交流会館特別企画展「入所者たちの足跡」批評―」阿部安成

Working Paper No.250「シリーズ『青松』を読む③ 手づくりで偲ぶ―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.251「シリーズ『青松』を読む④ 手づくりで悼む―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.252「「実用」の意味するところ 東京高商・東京商科大学商学専門部の英語教育における神田乃武の"culture"」坂野鉄也

Working Paper No.253「「星塚敬愛園を生きた人々」は、描けない―『星ふるさとの乾坤』を読む―」阿部安成

Working Paper No.254「「沖縄愛楽園に生きる」ことへの説諭―『理性主義と排除の論理』を読む―」阿部安成

Working Paper No.255「シリーズ『青松』を読む⑤ 手づくりを保つ―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.256「シリーズ『青松』を読む⑥ 手づくりで伝える―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.257「シリーズ『青松』を読む⑧ 手づくりが震え戦（おのの）く―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.258「シリーズ『青松』を読む⑨ 手づくりが続き、また、新たに―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.259「シリーズ『青松』を読む⑪ 手づくりで録す―国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて―」阿部安成

Working Paper No.260「帝国日本の国際課税制度と特質―英米との比較を通じて―」井澤龍

Working Paper No.263「谷本富の「新人物論」における商業道徳論 中島力造、ジョージ・トランブル・ラッドとの比較」坂野鉄也

◇史料館職員

館長・専任教員　青柳周一

兼任教員　須永知彦　学芸員　堀井靖枝　南田孝子

非常勤職員　溝口智子

◇運営委員

金子孝吉　坂野鉄也　山田和代　渡邊凡夫　井澤龍